

## モスクワの世界語者たち、再生の道

Moskvaj Esperantistoj – Ilia Vojo de Renaskiĝo

佐々木照央

Teruhiro Sasaki

2009年3月9日、4時から7時半にかけて、モスクワの「ヨーロッパ大学 JUSTO」(Eŭropa Universitato Justo)において、モスクワのエスペランチストたちの会合「レフ・トルストイ倶楽部」Klubo "Lev Tolstoj"に招かれた。準備してくださったのは学長のシーロ博士 Ŝilo, Gennadij Miĥailoviĉ、国際婦人デーという祝祭中にもかかわらず、多数の人々が集まった。僕のモスクワ滞在に合わせて急遽会合がもたれたという。

かねてより『エヴゲーニイ・オネーギン』の世界語訳者メーリニコフ Melnikov, Valentin Viktoroviĉ にお目にかかりたいと願っていたが、ここで実現した。芭蕉の世界語訳の校正をお願いしたら、こころよく引き受けてくださった。彼の翻訳にたいする僕の批評をとて喜んでくれ、自分にも気付かなかったことを指摘してくれた、と言われた。なお、その三日後サンクト・ペテルブルグの科学アカデミーロシア文学研究所「プーシキン館」を訪問したとき、元所長のフォミチョフ博士に世界語訳『オネーギン』の優秀さを伝え、是非送付してほしいと要望され、メーリニコフ氏を紹介しお互いに連絡するよう僕が仲介した。ロシア文学の総本山にはネクラソフ訳一点しか所蔵されていないのである。ほかに7つもある、というと驚嘆されていた。本家本元のロシア文学研究者の間でエスペラント熱が高まるのもそう遠い日ではない。

モスクワのトルストイ倶楽部で僕は僕の知っているロシア語の詩を暗唱するよう求められ、プーシキンの『青銅の騎士』の出だしを朗誦し、レールモントフの詩の一節を歌った。またたくさんの質問攻めにあい、エスペラントで応答した。集まった人々の名は次の通りである。

Gudskov, Nikolaj Lvoviĉ ; Ilutoviĉ, Klara Sergeevna ; Aroloviĉ, Viktor Semionoviĉ ;  
Ĉertilov, M. ; Ŝevĉenko, Aleksandr ; Samodaj, Vladimir Vladimiroviĉ ; Sveta ;  
Edelštejn, Vladimir Aleksandroviĉ ; Ĥmelinskij, Vadim Miĥailoviĉ ; Hutoviĉ ;  
Agafonova ; Lysova ; Smetanina ; Grišin ; Melnikov, Valentin Viktoroviĉ ;  
Ŝilo, Gennadij Miĥailoviĉ

等、錚々たる人々である。エロシエンコが話題に上ったとき、彼はスターリンの弾圧はまぬかれたものの、彼の著作が盲人用の点字で書かれていて、死後大量の紙が残されていたが、無知な人間の手に渡り焼却されてしまった、とメーリニコフ氏は言った。僕は、エロシエンコが中国や日本で多大の功績を残しながらソ連に帰国してから活躍できなかったの

が残念である、との意見を述べておいた。肅清は免れたものの肉体的命より大切な原稿が消滅した。また肅清時に多くのエスペランチスト達が根も葉もない罪を着せられ、トロツキストとして処刑または流刑された。僕が出会った上記の人々はその空白を埋め、さらにエスペラント文学を豊富にしようと努力している。何人かの簡略な経歴を記しておこう。

グツコーフ氏は 1953 年モスクワ生まれ。生物学が専門で、科学技術史家。1989 年からエスペラント教師となり、かつ人権運動活動家でもある。現在哲学も教える。無政府主義者ともいわれている。1982 年に『化学と生活』誌の B. Kolker の紙上世界語コースでエスペラントを知るが、エスペランチストとなったのは 1985 年である。1988-1992 年にエスペラント教育コープ「コプソ」(E-instrua kooperativo “Kopso”)の主要メンバーでコンツェボフスキイ Koncebovskij S、ゴンチャローヴァ Gončarova I たちと一緒に教育活動に励んだ。2000 年、モスクワでの SAT 会議の組織、ロシアエスペラントユニオン REU の理事 estrarano 及び会長(1994-95, 2002-2005)、ブダペストの隔週誌『出来事』Eventoj 編集者(1993-1994)、SAT メンバーで、「人民ロシアエスペラント運動 Popola Rusia Esperanto Movado」の主導者である。著書・評論も多数で、手がけた刊行物も多い、中でも日本に関係あるエロシェンコの『チュクチの生活より El vivo de la ĉukĉoj』(1992)の発行にも加わる。

サモダイ氏は 1936 年オデッサ生まれ。1958 年にエスペランチストとなる。教わった師はヴェルシーニン Veršinin A.I. 1960 年モスクワ大学東洋語学部に入學、専門はアラビア語。イエーメン、イラク、シリアで通訳として勤務。その後ジャーナリストとなる。『モスクワニュース』(週刊、多言語)で働き、アラビア語やエスペラント語を担当、その 1989 年のエスペラント語部門は注目を浴びた。SSOD (対外友好文化連合ソ連協会ユニオン Unuiĝo de Sovetiaj Societoj de Amikeco kaj Kulturaj Ligoj kun Eksterlando) のソヴィエトエスペランチスト対外連盟委員会で 1960 年代から 70 年代において活動、出版などでコンスタンチン・ゲーセフを支えた。ソヴィエトエスペラント青年運動 SEJM の創立者の一人。1979 年 ASE (ソ連エスペランチスト協会 Asocio de Sovetiaj Esperantistoj) 設立後その副会長となる。B. Kolker, A. Gončarov と共にソ連エスペランチストユニオン (1938 年消滅) SEU を再建、1989-1990 年にその初代会長に選出された。2004 年から UEA 名誉会員。ロシアエスペラント文化のために多大な貢献をし、1990 年からモスクワ文学エスペラントクラブ MLEK を指導、文集『脳と心 Cerbo kaj Koro』を編集発行した。彼の詩作、著作は William Auld にも高く評価された。温厚な好々爺という感じで親しみやすく、僕にも氏の発行する雑誌に寄稿するよう求められた。

イルトーヴィチ女史は僕と同じ 1946 年生まれ、モスクワ大学言語文化学部を卒業、1991 年にグツコーフ氏に学びエスペランチストとなる。1995 年から詩作、MLEKO に積極的に参加、彼女の詩は多くの雑誌に掲載された。(“Cerbe kaj Kore”, “Ruslanda Esperantisto”, “Moskva Gazeto”, “La Ondo de Esperanto”, “Scienco kaj Kulturo”, “Litova Stelo”等) 2005 年には自費出版で本を出版している。また、ロシア語からの翻訳、『実生活における

ーシキン Puŝkin en la vivo』(ヴェレサエフ著)も彼女の重要な仕事である。少し憂いのある表情をした知的な美女。神経を病んでいるという。

エーデルシュテイン氏は 1920 年ハリコフ生まれ。モスクワ大学卒の数学教師。1988 年にエスペランチストとなる。トルストイ倶楽部でゴンチャローフに学ぶ。MLEK に積極的に投稿。Cerbo kaj Koro に発表。1996 年からはエスペラントを教える。

フメリンスキイ氏は 1935 年生まれ、モスクワ大学大学院化学工学部卒業、失明し、その後視覚障害者のために働く。1982 年エスペランチストになる。盲目エスペランチストのクラブ「モスクワ人 Moskvano」を長い間指導。同時に科学者エスペランチストのクラブ「知識 Scio」に積極的に参加。エスペラントを学び始めて二週間で執筆開始。彼の詩や著作は点字誌にも掲載された。目をつぶったまま上を向いてずっとしゃべり続ける不思議な人だった。その傍らには若い盲目の少女がついていた。彼女のエスペラントも素晴らしかった。

アローヴィチ氏は 1946 年リガに生まれた。モスクワ大学で数学を専攻、理学博士候補。1966 年にエスペランチストとなり、70 年代には SEJM の指導者の一人となる。80 年代に ASE を通して普及活動。1990-1991 年 SEU(Sovetrespublikara Esperantista Unio)最後の会長。1992-1993 年ロシアエスペランチストユニオン REU(Rusa Esperantista Unio)初代会長。

メーリニコフ氏は 1957 年モスクワ生まれ。化学関係の技師で今はプログラミスト。バスや電車の車掌もした。クイズやゲームを好む。1982 年、ボリス・コルケル B. Kolker のエスペラント講座(『化学と生活』誌)を読んでエスペラントを学ぶ。REU の点検委員会 Revizia Komisiono 委員に何度も選出。また REU の証明・言語委員会 Atesta kaj Lingva Komisiono 委員、文学委員を務める。『エスペラントの波 La Ondo de Esperanto』誌編集者。1983 年から詩の翻訳。1989 年から自ら詩作。多くの雑誌に発表(“Paco”, “Hungara Vivo”, “Moskva Gazeto”, “Ruslanda Esperantisto”, “La Ondo de Esperanto”, “Literatura Fojro”等)。彼の詩集は“Moskvaro”誌に掲載された。MLEK に積極的に参加。1998-2000 年“Cerbo kaj Koro”『脳と心』誌編集。2005 年に『エヴゲーニイ・オネーギン』世界語訳出版。いかつい顔の厳しいまなざし、エキセントリックな感じを与え、鋭い発言により仲間との関係が悪化することもあった、という。しかし僕に対してはごく普通に話しかけてくださった。こわもての外見、しかし中身はとても謹厳実直な人物と思える。僕の芭蕉訳を面白いと言い、推敲の援助を約束してくれた。

シーロ学長は訪露にあたって予め連絡をとり、僕の要望を伝えておいた。彼とはオランダでの去年の会議で同席し、顔見知りであった。僕とメーリニコフ氏との間をとりもってくれたのみならず、モスクワのエスペランチストの会合をわざわざ開いてくださった。ヨーロッパ大学 JUSTO の学長であり、そこが会合の場となった。その大学はエスペラントを中心にして、法律と経済を教え、法律の専門家を育成している。最初シーロ氏らがたった二人で創立した。シーロ氏自身、法律専門で弁護士でもある。そこでは、速記とブラインドタッチのタイプを訓練させ、より速くメモをとり、記録する能力を身に付けさせる。集

中教育方式で、一週間連続集中で一つの課目、例えば法律、を教える。エスペラントはラテン語の法律用語を教えるのに都合が良く、また理路整然と論理展開する訓練に役立つ、という。法廷を想定してエスペラントでの裁判劇をテキストに採用している。これはシーロ夫妻が作成した大学のエスペラント教科書(*Esperanto dum 7 tagoj*, 2007)を見れば、速記と裁判劇に多くの頁があてられていることでわかる。

大学は1995年にシーロ氏とコムコーフ氏(エリツィン、プーチンの側近)によって創設され、効率的、速成的教育によって、多くの人材を官界、政界、経済界に提供してきている。外国で活躍する卒業生も多い。日本で有名な若手ピアニスト、コロベニコフもこの卒業生(2003年卒)の一人で、シーロ氏の愛弟子である。エスペラントを基本に取り入れた外国語教育によって語学能力の高い人材を育成している。ただし、去年から入学者が減っていること、大学の建物の入手がままならないこと、など問題も抱えている。

僕は3月10日10時から12時まで「日本におけるエスペラントとロシア文学」について、エスペラントとロシア語で講義した。シーロ氏から急遽依頼されたためである。二葉亭四迷について、大杉栄と中国人留学生について、エロシエンコについて学生たちに語った。9日の夜はシーロ氏の郊外のお宅に泊めてもらい、奥さんのリアナさん、娘のソフィヤちゃんの歓迎を受けた。シーロ氏もエスペラントのために70年代不当な評価を受け、苦勞したという。論文や成績など、好ましくない材料を用いているという理由で低い評価を受け、就職などで差別された、とのこと。しかし、弁護士として優秀さを認められ、今日の地位を築いてきた。エスペラントは大学設立当初から中心に据えようと意図していた。速記とタイプとエスペラント、プラス法律経済知識、これが氏の教育の眼目である。僕には、文学的素養の大切さを学生に教えてほしい、と要望され講義することとなった。

シーロ氏の大学設立は刺激的である。日本の法科大学院でエスペラントが教えられる日がくるだろうか? 模擬裁判をエスペラント劇にしたテキストによって、生徒たちに芝居をさせながら討論術を教える、という方法もなかなか独特である。

モスクワのエスペランチスト達との出会いは僕にとって歴史的な事件であった。スターリンの忌まわしい粛清の犠牲となったエスペランチスト達の衣鉢を継ぐ後継者たちが今高い水準の活動をしているのを、僕はみた。ロシアは再び世界のエスペラント運動の一翼をになうことだろう。今回、『エヴゲーニイ・オネーギン』のエスペラント訳の優秀さをロシア文学研究者たちに伝えることができ、ロシア国内の結びつきを拡大することができた。また、モスクワではチェーホフ劇の舞台監督グルチェンコ氏にチェーホフの同級生ザメンホフのことを語ると、チェーホフ劇のエスペラント訳で舞台を作って二人の生誕「150周年」を祝おう、「同級生から同級生への贈り物だ」と彼の口から言われた。それをシーロ氏にも伝えておいた。シーロ氏もこの提案には乗り気だった。ロシア文学における僕のコネがロシアのエスペラント網の拡大に役立つなら、とても嬉しい。ロシア文学の研究にエスペラント訳が不可欠の資料となる時代が来た。日本文学の研究にもその時代が来ることだろう。

## 1) レフ・トルストイ倶楽部

2009年3月9日に招かれたモスクワのエスペランチストの集まり、「レフ・トルストイ倶楽部」の歴史について概略を述べておこう。これは1987年ゴンチャロフ Anatolo Gončarov が創設した。彼はソ連エスペランチスト青年運動 SEJM(Sovetia Esperantista Junulara Movado)の最初の会長 Prezidanto(1966-69, 1972-74)として活躍した。ちなみに、その SEJM 会長には、V.Ŝilas(1969-71), B.Kolker(1971-72), V. Aroloviĉ (1974-76), M.Bronŝtejn (1976-77) などがなっている。この「レフ・トルストイ倶楽部」を1988年から1990年、グツコーフが主導して、エスペラントへの翻訳技術向上を目指して機能するようになった。ゴンチャロフはクラブの特別支部を1989年に立ち上げ「モスクワ文学エスペラントクラブ」MLEK(Moskva Literatura Esperanto-klubo)として月一回の頻度で開催しはじめた。1990年からこれをサモダイが引き継ぎ軌道にのせた。サモダイ自身が運動の組織者としてのみならず、優れた詩人でもあった。1991年、さらにサモダイからグツコーフに引き継がれた。1993年-94年にはヴァレンチン・メーリニコフがクラブの運営を引き受けた。

クラブの会合は90年代から月例となり、エスペラントで散文や詩を創作、および翻訳するエスペランチスト達が集まる。散文よりもはるかに詩を発表するほうが多い。参加者達同士で相互に批評しあい、自由かつ厳しい意見が交わされる。著作や翻訳をしない参加者も一般読者として会合に出席した。クラブは文学サークルとなっていた。モスクワ在住の者ばかりでなく、地方からもエスペラント詩人や弾き語りの歌手達がクラブに参加してきたモスクワでは、六十年代から弾き語りも盛んで、オクジャワ、ヴィソツキイ、など多くの詩人歌手が活躍した。その流れに沿って、エスペラント世界でもミハイル・ブロンシュテイン Mikaelo Bronŝtejn の才能が開花した。彼はモスクワ在住ではなかったが、トルストイ・クラブの会合に参加し、自作の詩歌や翻訳を披露し、大きな刺激を与えた。

他人の創作過程を目の当たりにする、という実体験は己の創作意欲を刺激する。例会の醍醐味はそこにある。自分の新作を発表し、友情溢れる批判を受けてさらに作品に磨きをかける。そういう場がトルストイ・クラブである。その雰囲気の中で、数々の作品が生まれていった。ヴラデーミル・エーデリシテイン Vladimir Edelŝtejn、ソロモン・ヴィソコフスキイ Solomon Vysokovskij、イヴァン・ナウモフ Ivan Naumov、ミハイル・ギシプリング Miĥail Giŝpling、クララ・イルトーヴィチ Klara Ilutoviĉ、グリーシャ・アローシエフ Griŝo Arosjev、らの作品であり、ヴァレンチン・メーリニコフの『エヴゲーニイ・オネーギン』世界語訳である。散発的に、個々別々に、離れ離れで創作活動をするのではなく、トルストイ・クラブで発表し仲間の批判をあおぎながら、高い水準の傑作が生まれていった。1990年代、このクラブはエスペラント詩歌の揺籃の場となった。

## 2) 文集発行

「モスクワ文学エスペラントクラブ」MLEKは機関誌文集『脳と心』[Cerbo kaj Koro]

誌を発行する。サモダイが各号を入念に割り付けし、編集した。発行部数、なんと 20 部から 100 部！ 我等が『ポンテート』より少ない。クラブ参加者、訪問者、及び外部者向けである。文集は作者にとって、仲間の結束をはかり自分の作品を活字化して友達に知らせる、という意味を持っていたのであって、広い読者大衆をあてにしたものではなかった。1990 年 5 月、A 4 版 12 頁の第一号を発行、その後はだいたい 20 頁が基本で、22 号だけ 24 頁であった。1990 年に 9 号発行、1991 年に 3 号、1992 年に 10 号発行したが、サモダイは諸事情の都合により、編集を辞した。

しかし、文集継続を希望する会員達はその後『モスクワ雑誌』[Moskva Gazeto]という世界語運動の定期刊行物の文芸欄に「脳と心・文学クラブ」[Cerbo kaj Koro. Literatura klubo]欄として 1992-1995 年の間 13 回発表しつづけた。この欄を主導したのはブロンシテインであった。彼はこの欄を全ロシアのエスペラント文学クラブの欄にしようと志していた。しかし、『モスクワ雑誌』そのものが 1995 年に停刊してしまった。そこで、またサモダイが 1995 年 4 月から 20 頁の『脳と心』誌をコンピュータを利用して刊行することとなった。

MLEK で生まれた作品の質はさまざまであった。その誕生にあたっては、各人が他の人々の過誤から学んでいく。つまり、切磋琢磨である。ミスは他の人々の教訓になる。同じ作品を翻訳しあって、比較する、という練磨もあった。ロシアの詩歌の翻訳にあたっては、原文と世界語訳とを併記した。読者が原文と翻訳を対比しながら読んでいけるように、と。

『脳と心』誌はエスペラント作家・翻訳者各人が自分の技術を磨く場を提供した。サモダイは 50 号発行を契機に編集を辞した。しかし、彼は 1995 年からシーロ氏設立のヨーロッパ法科大学 JUSTO から隔月発行の『科学と文化』Scienca kaj Kulturo 誌の編集に従事する。この『科学と文化』誌は『脳と心』誌の伝統を引き継いで MLEK 会員の著作発表の場となっている。

### 3) 世代

このモスクワ「レフ・トルストイ倶楽部」において新世代のエスペラント詩人が輩出した。ミハイル・ギシプリング、イヴァン・ナウーモフ、ヴァレンチン・メーリニコフ、クラウラ・イルトヴィチなどである。これらを第三世代としよう。

彼らの水準は前の第二世代の詩人たち、コンスタンチン・ゲーセフ、ボリス・トカレフ（トルナード）、ブロンシテイン、リュドミラ・ノヴィコヴァ、イヴァン・ルビャノフスキイ、ヴラヂーミル・サモダイに続き、その伝統を継承している。

新世代の詩人たちの源流をたどれば、第一世代にあたる草創期の人々、ホフローフ [1891-1953]、デシキン [1891-1967]、ログヴィン [1903-1980]、ミハルスキイ [1897-1937]、ネクラソフ [[1900-1938?]]らが出た。

まさに、スターリンの悲惨な粛清をかううじて生きのびた遺伝子が再生したかのようである。粛清の過程で多くの貴重な世界語文献が喪失した。『戦争と平和』をはじめ多くの訳業が日の目を見ず行方不明となった。エロシェンコの残した膨大な点字文書も、メーリニ

コフ氏によると、価値の分からぬ人々がゴミとして棄ててしまった。しかし、それにもかかわらず、前世代は、外国文学図書館に貴重なエスペラント文献を残し、第一世代はアレクサンドル・サハロフ文庫、第二世代はボリス・トカレフ文庫を残した。

#### 4) 粛清後の発芽

ソ連における世界語再評価は、1956年『言語学の諸問題』誌に掲載されたボカレフとアフマーノヴァの論文「言語学問題としての国際補助言語」から、とされている。ボカレフ[1904-1971]はダゲスタン語の専門家で言語学者であった。インテルリングイスタカ *Interlingvistika* としてエスペラントを研究し、辞書も作成した。粛清前の辞書についてはいつか別に論じることにしよう。ボカレフの1966年に出た露・エス辞典、1974年のエス・露辞典は今に至るもロシア語圏の基本辞典である。

1957年8月にモスクワで全世界青年学生祭が開催され、26の国から250人のエスペランチストが参加した。ソ連政府はそれに参加できる国内の青年エスペランチスト達を急遽つものった。その中の一人が、後のトルストイ倶楽部にも参加するギシプリングである。彼は1943年から独学でサハロフやカバーノフの本を読み勉強していたが、モスクワでは自分を唯一人のエスペランチストだと長い間思っていた。この祭で初めて彼は他の世界語者と会話し、彼はその祭後モスクワにエスペラントクラブ「火花」*Fairero*を組織しそのリーダーとなった。しかし、彼は3年ぐらいでその活動を止めてしまい、その後長い休止期間を経て、1980年代からロシア語詩の世界語訳をてがけ、1991年から『脳と心』誌などに詩を発表している。

1962年、ソ連対外友好文化連絡協会同盟 *SSOD[CCOD: Союз советских обществ дружбы и культурных связей с зарубежными странами]*の中で、ソ連エスペランチスト国際連絡委員会[*E-Komisiono*]がボカレフを長として組織された。ここから世界大会へのソ連世界語者たちの参加が可能となった。1963年のソフィアでの世界大会以後、ずっと参加しつづけることとなる。この委員会の下で、ソ連宣伝の世界語誌『平和のために』[*Por la Paco*]が発行される[1964-76]。そこで、ゲーセフ、ホヴェス、そしてトルストイ・クラブの育ての親サモダイが活動する。とくにゲーセフはマヤコフスキイやエフトゥシェンコの世界語訳をてがけ、*Por la Paco* の中心的担い手であった。

1966年モスクワ近郊でソヴェトエスペランチスト青年運動[*SEJM*]が創設された。その初代代表 *Prezidanto* がゴンチャロフ、つまり後のトルストイ倶楽部の創立者である。また1979年モスクワで共産党と政府の支援で全国組織「ソヴェトエスペランチスト協会」[*Asocio de Sovetiaj Esperantistoj (ASE)*]が創立された。その会長はイサーエフ、副会長の一人にサモダイが就任する。このASEの指導下で、1980年代末までにソ連全土で200以上のエスペラントクラブが誕生し、多くの刊行物が出された。*Moskow News*の補遺に政治的内容のエスペラント文献が一万の発行部数で発行された。この編集発行にサモダイが関わっている。サモダイはさらに1989-90年、「ソヴェト共和国エスペランチスト統一同盟」

[Sovetrespublikara esperantista unio (SEU)]の初代代表 Prezidanto にもなる。これは ASE をもとに 1989 年 1 月再建された全国組織である。1989 年 5 月には SEJM にかわって「全ソエスペラントクラブ統一組織」[Tutsovetia Unuiĝo de E-kluboj(TUEK)]がつくられた。また 1990 年末、モスクワで開催された SEU の会議で、ヴィクトル・アロロービチ Aroloviĉ(トルストイ倶楽部会員)が代表 Prezidanto となった。しかし、1991 年ソヴェト連邦そのものが崩壊してしまった。1991 年末、SEU は REU[ロシアエスペラント同盟]に改名した。1993 年の REU は会費納入者が 40 名まで落ちる。分裂傾向は強まり、1992 年地方都市エカテリンプルグで「ロシアエスペラント協会」[Ruslanda Esperanto-Asocio (REA)]が作られロズガチェフ[Lozgaĉev, N.V.(1957-1998)]が会長となる。だが、1994 年、REA と REU は合同し、モスクワ「トルストイ倶楽部」のグツコーフがその代表 Prezidanto になる。1995 年 10 月、チュメニでの REU 会議でウラルのアレクサンドル・コルジェンコフ[Korĵenkov]が次ぎの代表に選ばれる。コルジェンコフは主に出版社「季節(Sezonoj)」から多くの世界語文献を発行している。それに対し、モスクワは「突進(Impeto)」出版で発行している。

おわりに

モスクワのエスペランチスト達と出会い、ソ連、ロシアのエスペラントの歴史を目の当たりにした思いである。彼らの一人一人が、詩や文学の創作、エスペラント文化の継承、において大きな足跡を残してきた。「レフ・トルストイ倶楽部」に集う会員は少数でも、歴史を創ってきた。独裁者の狂気と愚行によって根絶されかかったロシア世界語は個々人の創造的努力で力強く再生してきた。個人の力こそが生命力の原泉である、ということを実感した。肝要なのは、数の多さではない。少数でも、お互いが切磋琢磨する場があり、文字で記録する刊行物があれば、歴史を創る。文学創造、相互批評、記録、出版、これが再生の必要条件である。たとえ集まりは小規模でも、この必要条件を確立し維持すれば、歴史発展に貢献できる。廃墟の再建においては既存の大組織や資金力に依拠するのではなく、個人と緊密な仲間で自分の可能な事を着実に遂行していく、これが世界のエスペラント発展の原動力となる。Se gut' al guto aliĝas, maro fariĝas. 死んだ海を蘇らせるのも生き生きした一滴である。また、長い経験をもつ老練エスペランチストはサモダイ氏のように、後から来る者達の誘い水となる。モスクワの出会いで、サモダイ氏から僕は原稿執筆の依頼を受けた。いつでも、原稿を送ってくれ、と暖かい声をかけてもらった。それだけでも、エスペラントをやって良かった、と思う。

参考参照文献

- 1) Valentin Melnikov, Klara Ilutoviĉ, Solomon Vzsokovskij, Oĉjo Dadaev, “Moskvaro: Originalaj poemoj”. Moskvo, “Impeto”, 1998
- 2) Halina Gorecka kaj Aleksander Korĵenkov, Esperanto en Ruslando: Historia skizo.



Jekaterinburg, “Sezonoj”, 2000

- 3) Josip Pleadin, Ordeno de Verda Plumo. Leksikono pri Esperantolingvaj Veristoj. 2006
- 4) Mikaelo Giŝpling, Vespere. Moskvo, “Impeto”, 2008
- 5) Олег Красников, История союза эсперантистов советских республик; Детлев Бланке, История рабочего эсперанто-движения. Москва, «Импето», 2008

#### 追記

ネクラーツフ訳『エヴゲーニイ・オネーギン』を下さった栗栖継先生が4月18日に他界された。肉体は消滅しても、先生の創作、行為、言葉は生き続ける。僕は、先生の晩年にお会いし、甚大な影響を受けた。先生は無私の奉仕の人であった。僕はその奉仕を受けながら、何のご恩返しも出来なかった。それどころか、自分の怠惰さから先生にお会いするのを恐れていた。ペトロの鶏鳴が痛い。